

祐子 四歳

肉親との初めての別れ ～天国の祖母を忍んで～

小 蘭 江 幸 子

びわの好きな義母でした。毎年六月になると、きまつて義母の知人より大粒のびわが届けられ、隣に住む私共長男一家も、おすそわけにあずかっておりました。

去年の春は、義母が植えたと思われる勝手口のびわの木が、初めて実をつけたというのに、義母はそれを味わってみることもなく、永遠の眠りについてしまいました。五月二十日のことでした。

まだ青く固いびわの実の下で、四歳の長女祐子と私は、病院から帰宅した義母の亡骸を出迎えたのでした。

「おばあちゃん、お帰りなさい。」と声を出して迎え入れたものの、もはや二度と目をあけて、自分に語りかけてくれることはないのだということを、祖母の顔を見るなり、祐子は悟ったようでした。

二日後の告別式で、棺の中の祖母を花で埋め、ふたを打ちつけた時、祐子は、私のスカートの端をしっかりと握りしめ、ポロポロと涙をこぼしておりました。

「おばあちゃんの体はね、死んでなくなってしまうの

「お骨はしばらくしたらお墓におさめてしまうけれど、おばあちゃんは、いつも祐子の心の中に住んでいるだけ、本当のおばあちゃんは、これからも、いつも祐子と一緒にいて、祐子のことを守ってくださるのよ。だから、じきに淋しくなくなるのよ。」祐子を抱きしめてなくさめながら、実は、自分の父親を失った時のことを思い出しておりました。私の弟は、焼場の煙突から出る煙をみて、「ビニール袋につめこんでとつときいなあ。」とつぶやいておりましたが、私の方は父が息を引きとった時から、亡骸を清めながらも、そして骨をひろう時にも、これはもはや父親でもなんでもない、本当の父はいつも私の肩先にとまって私に語りかけてくれる父だけなのだから……と思ったものでした。

焼場で灰になった祖母の骨を見て、「このお骨のおばあちゃんが、これからは、私のことを守ってくれるの？」と、急に現実的なことを質問してくる祐子でした。

「お骨はしばらくしたらお墓におさめてしまうけれど、おばあちゃんは、いつも祐子の心の中に住んでいる

のよ。」それから納骨まで、義母の遺骨は、昼は、空家になってしまった義母の家の仏間にすえ、夜は、私共長男一家の居間に連れてくるという具合に、二軒の家を往ったりきたりしておりましたので、祐子も私も、義母が生きていた時と同じように、朝夕、話しかけながら過ごすことができました。

祐子は、時々思い出したように、祖母の残していつてくれた「美しき天然」のオルゴールを回してはききいておりました。「これを聞いているとおばあちゃんの顔をすぐ思い出せるの。めがねかけてね。」「おばあちゃんのお薬を数えて包んであげるのが私の仕事だったので。」「もう一度おばあちゃんに会いたいなあ。」と涙ぐむのでした。生前の義母は、どちらかといえば、私共夫婦よりもむしろ、祐子にとっては厳しい祖母だったのではないかと思えます。義母から要求されるしつけ等についての内容が、祐子にはどのように受けとめられているのだろうかと不安になったこともありました。「おば

「あちゃんに会いたい。」という祐子のことばの中には、何ものにもかえがたい祖母と孫娘との心のつながりを感じさせられ、私も救われたような気持ちになります。祖母から寄せられる敵しくも暖かい愛情を、祐子はしっかりと受けとめていたのでしょう。

勝手口のびわの実の収穫は、義母の納骨の直前でした。百個にみたない実りでしたが、毎日のように収穫を指折り数えて待っていた祐子にとっては、最高の「おばあちゃんからのプレゼント」でした。「天国のおばあちゃんから、宅配便で送ってきたびわよ」と祐子は、父親や親戚に告げ回っていました。

実は、このびわの木は、祐子が生まれた年に、庭を整備してくれた植木屋さんが、果実をつける木は、「成り下がる」に通じて縁起が悪いので、切ってしまうように、と言ってくれた木なのです。その時、義母は、「そのうち、実をつけると思うから放っときましょう。」と、おそらく幼い祐子達のために、切らずに残しておい

てくれたのだと思います。その義母が、去年の秋には、癌の末期となっていました。そのことを、家族達は、義母に知らせずにきました。びわが実をつけたことに私気がついた時には、義母の病状は相当に悪化しはじめていましたので、びわのことを義母の耳に入れるチャンスは最後までめぐってきませんでした。なにしろ、一度、縁起が悪いといわれたびわでしたから。むしろ義母の目にふれないようにと念じたい思いでした。切ってしまうべきだったかとも思いますが、それは義母の家の義母の木ですし、話題にのぼって病気に障るようなことは、できませんでした。かくして、このびわの木は、びわを愛した義母から、びわの好きな祐子への天国からのプレゼントということになったのです。

さて、この八月、祐子は、いつも忙しい父親が、折角、骨折って連れまわしてくれたスケジュールが負担すぎたのか、夏季熱をこじらせて、三十九度の熱が一週間ほども続き、ほとんど食事がとれないような状態でした。

た。そんな折り、亡くなった義母の親友が訪れて下さり、「毎年、届けてあげる慣例だったから、お仏壇に供えてください。」と、信州のとうもろこしと、五平餅を届けてくださったのです。この五平餅がまた、我家の子ども達の好物で、頂き物をした時には、義母はいつも私共のところにも分けてくれたものでした。祐子は五平餅をみると、「きつと天国のおばあちゃんが、祐子に食べさせてってNさんに頼んでくれたと思う。」と喜び、御飯がわりに、二食、五平餅を食べ、食欲を回復させていったのでした。食の進まない祐子に、「そんなことでは、天国のおばあちゃんが、祐子をお迎えに来てしまふのよ、それはまだ困るでしょう。」と叱っていた私の声が、天国の義母の耳に届いてしまったのかもしれない。天国と地上に別れてしまってもやはり、「姑と嫁」……と、義母は苦笑しながら援助の手をさしのべてくれたのかもしれない。

さて、この九月には、祐子、章博に続いて三人目の新

しい命が、私共一家の一員に加わる予定です。義母の闘病中に私が懐妊してしまったために、充分な孝行ができなかったと思うのですが、この調子では、きつとあれこれ、天国からの援助が届くような気がします。

こんなふうにして、義母は、祐子達孫や、嫁の私に、肉親の暖かいイメージを残していつてくれたのでした。お義母さん、長い間、ありがとうございました。どうぞゆっくり眠ってください。

(はるにれの会)

